



平成 28 年 9 月 29 日

国際審判員 松田 雅彦
(神奈川県ボート協会)

2016 World Rowing Masters Regatta (08th, Sep, – 11th, Sep, 2016 Copenhagen, Denmark)

I. はじめに

2016年9月8日(水)から9月11日(日)に Copenhagen, Denmark で開催されました World Rowing Masters Regatta に国際審判員として参加致しましたので、審判業務及び大会概要に就きまして報告申し上げます。

9月6日(水)10時30分成田発、15時10分 Amsterdam 着後、乗換、17時00分 Amsterdam 発、同日18時20分 Copenhagen Kastrup 国際空港に到着した。時差は約7時間。Copenhagen 空港では案内の表示に日本語、韓国語、中国語で記載されたものがあり便利であった。この3か国からの渡航者が多いという事であろう。又、この空港は搭乗案内などのアナウンスが一切無く非常に静かな空港である。どこに行っても丁寧なアナウンスが響いている日本と比べるとかなり違和感がある。大会会場でも「只今行われているレースは・・・」といったアナウンス類は一切無く、静かであった。この国の習慣であろう。(聞いてみると駅等でも遅延等のアナウンスも無いとの事。)

Copenhagen 空港では現地 OC の方の出迎えがあり無事宿泊ホテル(KolleKolle)に到着した。概ね同時刻に到着する者2人~5人を纏めて送迎していた。小生はアルゼンチン ITO Ms. Angela と一緒だった。彼女はスペイン語とドイツ語を話し、英語はそれ程でもないとの事だったが小生以上の会話能力はある。空港からホテルは車で約30分、大会会場から車で約10分の距離。ITO/NTO はバスの送迎があったが、クルーは公共交通機関等を使用して自力でコースまで来ていた。コースは最寄駅から徒歩20分であった。

空港での出迎えは国や大会の規模により異なると思うが、今回は到着ロビーで「World Rowing」と書かれたプラカードを持って待っていた。到着ロビーの隅にカウンターを設けている場合があるが、初めて来る場合はプラカードを持って待っていてくれる方が判り易いであろう。因みに帰国の際は大会終了日(大抵は日曜日)に帰国する場合は現地 OC が空港まで送迎してくれるが、翌日になると、今大会がそうであったが自力で空港まで行かなければならない場合がある。これは開催国により異なるので事前にチェックが必要である。余談だが、Amsterdam 行きの機内で隣席の御仁と会話した処、当然小生が何しに行くかという質問をされたので、よく有りがちな「水上スポーツでどの競技だと思っか?」と言った処、最初の回答はカヌー、次はヨットで、小生から「カヌーでもヨットでも無ければ何か?」と問うた処、「わからない」であった。ボートである事を伝えた処、「そう言えば・・・」(そんなスポーツもあったか)と言う感じであった。リオ五輪でカヌーがメダルを取得した事も大きく影響していると思うが、根強く意識に残る様な普及活動が必要であろう。

通常の大会であればホテル内に大会に関する情報が掲示されており、Jury Member はそれらから情報を入手

する。然し乍、今大会はホテルに行動予定表は掲載されず P. Jury Mr. Lars からメールで大会運営の情報が届きそれに基づいて行動した。不明な点はメールで質問すると迅速に回答があった。だが、この方法はメール受信媒体をある程度常時有する必要がある。ホテルに掲示する手間や情報の迅速性を考えれば合理的な方法であるが、スマホ等の媒体も有しない者には不便である。(大会会場の Jury Meeting Room には予定表は貼られてあった) 又、Jury Member 用の個別ボックスも今大会では用意されていなかった。空港から直接ホテルに向かう者が多いとすればホテルロビーにも大会概要を掲示する方が判り易いであろう。

9月7日(水)12時00分にバスでホテルを出発し、コースに到着、Accreditation 等の手続きを行い、Jury Meeting 控室に向かった。World Cup の様な大会とは異なり、要所に監視員を設置し ID Check をする様な対応は取っていないかった。今大会では1日当り約100人のボランティアを確保しているとの事。審判団の補佐、配艇、Accreditation、食堂等であるが、非常に真面目に良く動いていた。

又、今大会は朝のみホテルで昼夜はコースでバイキング形式の簡単な食事を取った。本大会は特に予算に苦しんだ大会に見えた。マスターズ大会では資金も集まりにくいのであろう。従って参加者の出漕料で賄わねばならず、出漕者を増やす為過密スケジュールとなる。であればある程度は出漕者に配慮した運営にならざるを得ないだろう。

Denmark の正式名称はデンマーク王国、人口約565万人、日本と比べてかなり少ないがボート競技ではメダリストも出している。EU加盟国であるが通貨はクローネを使用している。言語は Denmark 語であるが多くの国民が英語も話す。

Copenhagen の歴史は、12世紀半ばに始まり、17世紀には多くの建築物が建てられた。現存する赤レンガが造られたオランダ・ルネッサンス様式の歴史的な建造物は、殆どがこの時代に建てられたものである。市街地では、建築物の撤去が容易に許可されず、やむを得ず建替えが必要な場合でも周囲の建物との調和を義務付けられている。

デンマーク国内には5か所のレガッタコースがあり、国際大会開催が可能なのは今回開催されている Lake Bagsvaerd Course のみとの事。冬場は気温が約マイナス15度になる事もあり、ボートを漕げるのは4月～10月までとの事。冬場は専らエルゴトレーニングである。国内審判員は約30名でその内国際審判員は8名、近い内に女性審判員2名が国際審判受験予定との事。

II.大会概要

1. 大会日程

| | | |
|----------|-------------|--|
| 9月7日(水) | 13:30～ | Jury Meeting |
| | 16:00～17:30 | Opening Ceremony at Copenhagen Town Hall |
| 9月8日(木) | | Racing |
| 9月9日(金) | | Racing |
| | 19:30～ | Dinner with ITO and NTO |
| 9月10日(土) | | Racing |
| | 19:30～ | Masters Party |
| 9月11日(日) | | Racing (Mixed) |
| | 14:00～ | Closing Ceremony |

大会は09時00分頃から18時00分頃まで概ね3分間隔で行われた。世界47ヶ国から約584団体、約3460クルーの出漕である。過密なレーススケジュールであるので審判団も1日を4つの時間帯に分け、早番、遅番の2班体制で行動した。早番、遅番といってもホテルからのバスは朝1便しかなく、Jury

Member は業務時間に関わらず 06 時 30 分ホテル発のバスに乗り込み、コースで待機した。

Masters は年齢別（下記御参照）に分けられ、レース毎に勝敗を決めるものである。レーンより出漕者が多い場合、そのカテゴリの全出漕者を数組に分け、各々のレースで 1 位のみメダルが授与される。勿論、異なるカテゴリを同一レースで行う事もあり、メダルは各々のカテゴリ対して授与される。FISA Rule 及び大会要項ではユニフォームは統一する様に記載されているが、通常の大会と比べかなり緩い。P.Jury Mr.Lars からはユニフォームは細かく注意する必要は無い旨指導があった。又、FISA Rule には Mixed race はユニフォームを統一する必要は無いと記載されている。今大会でもかなりの服装の不統一が見られたが、Masters という事で受け入れられている様である。CC での ID Check も初日はクルー全員行ったが、2 日目以降はランダムにチョイスし、各クルー 1 名~2 名の Check で良いとの指示が出た。参加クルーが多く Pontoon が混雑する事を避ける為であると思料。艇計量は行わなかった。

又、Masters 大会特有の事であろうが、レース結果が掲示される掲示板の横に「Cox 求む」、「Cox 必要ありませんか?」、「漕手求む」「漕手必要ありませんか?」等の求人票（連絡先も記載）の様なもの多数掲示してあった。この様に掲示するという事はお馴染みの事なのであろう。

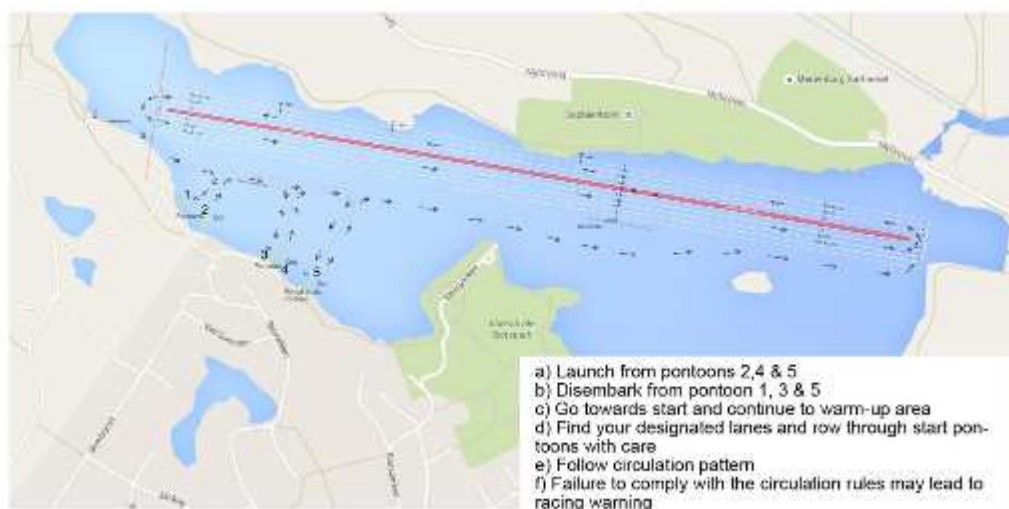
艇については、日本からの参加団体（団塊号、鶴見川マスターズ、三菱シニアボートクラブ、濃青会、名古屋大学 OB、稲門艇友会、瀬田漕艇倶楽部、魚崎ローイングクラブ、日本ボートマンクラブ、WK マスターズ、淡青会、キラールホエール等）もそうであったが、遠方の参加者はレンタルする。今大会では Filippi 社が独占して艇のレンタルを行っていた。唯、艇のレンタルは発艇定刻の 40 分前からとされており（これは Filippi 社が決めている）、リギングの時間を考えるとかなりタイトなものであるだろう。Bow Number の配布は発艇定刻から 1 時間前。

この辺りは北緯約 55 度（日本は北緯約 35 度）の為、この時期は日没時間が若干遅く、日出は 06 時 30 分頃、日没は 20 時 00 分頃。気温は 20°C 前後で同時期の日本と比較すると過ごしやすい。

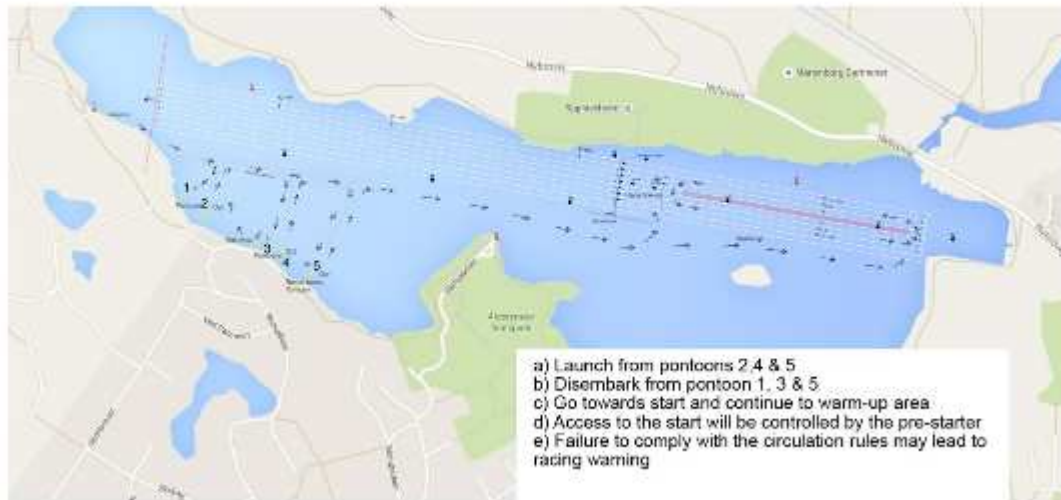
2. コース

Lake Bagsvaerd Course

Traffic Rules Training



Traffic Rules Racing



Lake Bagsvaerd Course は Copenhagen 市街から約 13km にあり、1940 年代から国内外問わず多くの大会が開催されている。

湖の周囲は舗装されており散歩、サイクリング等が行われている。

コースは 2000m、0 レーンから 7 レーンの合計 8 レーンあり、レースは 1 レーンから 8 レーン全てのレーンを使用した。それらプラス スタートに向かうレーンがある。今大会は Cool Down は一切禁止とした。参加クルーが多く接触等の危険がる為、レース終了後は速やかに Pontoon に戻る様クルーに指示した。

今大会は 1000m レースであるので、レースは 1000m→2000m を使用し、0m→1000m は warming up area となった。

3、エントリークルー数 / エントリー団体

Masters は国別というよりも各国の団体 (クラブチーム) の対抗戦であると言える。今大会は 47 ヶ国、584 団体から 3460 クルーが参加していた。その中で 80 歳以上の漕手は 30 人いた。

4. Masters Regatta

①種目

| | |
|-------|----------------------------|
| Men | 1X, 2X, 2-, 4X, 4+, 4-, 8+ |
| Women | 1X, 2X, 2-, 4X, 4+, 4-, 8+ |
| Mixed | 2X, 4X, 8+ |

②Age Category

| | |
|----------|------------------------------|
| A | Minimum age 27 years or more |
| B | Average age 36 years or more |
| C | Average age 43 years or more |
| D | Average age 50 years or more |
| E | Average age 55 years or more |
| F | Average age 60 years or more |
| G | Average age 65 years or more |
| H | Average age 70 years or more |
| I | Average age 75 years or more |
| J | Average age 80 years or more |
| K | Average age 85 years or more |

マスターズは 27 歳以上が出漕出来る。上記の平均年齢は Crew のみで Cox は含まない。
 又、Mixed Crew(混成)は Cox を除き男女半々。又、Cox の性別は問わない(男子種目に女性 Cox の参加は認められ、その逆も可) その際の体重制限は男性 Cox も女性 Cox の体重制限に合わせ 50kg とする。今大会では Cox 計量は決められた場所で全員行うのではなく、CC 担当の Jury の判断で体重が疑わしい (Dead Weight の必要があるのでは?) Cox のみ計量する様に、との指示があった。結果として疑わしい Cox はいなかったので計量はしなかった。

5. 参加審判員

| Jury Members (20ヶ国 合計 23名) | NFS | Lic No. |
|--------------------------------|-----|---------|
| ① Christoffersen Lars (P.Jury) | DEN | 963 |
| ② Nissen Jan (Deputy P.Jury) | DEN | 1261 |
| ③ Dobler Angela | ARG | 1652 |
| ④ Smith Gregory Edward | AUS | 1613 |
| ⑤ Van Belle | BEL | 1244 |
| ⑥ Brochier Kist | BRA | 1679 |
| ⑦ Horne Allan | CAN | 1608 |
| ⑧ Klemes Ivo | CZE | 1209 |
| ⑨ Kyllsbech Keld | DEN | 1259 |
| ⑩ Lorient Perez | ESP | 1464 |
| ⑪ Purge Priit | EST | 1701 |
| ⑫ Rantamaki Jari | FIN | 1562 |
| ⑬ Forshaw Eleanor | FRA | 1672 |
| ⑭ Packer Richard | GBR | 1586 |
| ⑮ Krajewski Stephan | GER | 1435 |
| ⑯ Saygel Burce | TUR | 1675 |
| ⑰ Pescia Giacomo | ITA | 1587 |
| ⑱ Masahiko Matsuda | JPN | 1614 |
| ⑲ Bijderwieden Rob | NED | 1173 |
| ⑳ Du Plessis | RSA | 1466 |

- ① Golob Borut SLO 1207
- ② Tunc Ali TUR 1420
- ③ Vajda Nikola USA 1193

NTO は地元デンマークのみでなく欧州各国から派遣されていた。NTO は合計 32 名、合計 55 名の Jury Member であった。



Jury Members ITO/NTO (with Wonderful Crews!)

6. 審判業務

①審判部署 (小生)

- Sep, 08th : 08 時 00 分～10 時 05 分 Waiting
(Thu) 10 時 17 分～12 時 23 分 Judge at Finish ※Board of Jury
12 時 35 分～14 時 55 分 Waiting
15 時 07 分～17 時 16 分 Umpire 3
- Sep, 09th : 07 時 30 分～10 時 07 分 CC Out Pontoon4
(Fri) 10 時 19 分～12 時 27 分 Waiting
12 時 39 分～14 時 44 分 Judge at Start
14 時 56 分～16 時 56 分 Waiting
- Sep, 10th : 08 時 30 分～10 時 32 分 Judge at Finish
(Sat) 10 時 47 分～12 時 41 分 Waiting
12 時 53 分～15 時 20 分 Waiting
15 時 32 分～17 時 11 分 Umpire 1
- Sep, 11th : 09 時 00 分～11 時 05 分 Waiting
(Sun) 11 時 17 分～13 時 05 分 Starter ※Board of Jury

Masters は通常の大会と異なり、参加クルーが多い為、Marshal を設置する事によりスムーズな大会運営を行っている。部署は以下の通りであるが、練習水域に 2 ヲ所の Marshal が置かれ、又、Counting Marshal (Check Point Charlie)が回漕レーンを良く視認出来る場所（今大会では 150m 付近）に置かれ通過するクルーをチェックしていた。Starter 及び Pre Starter は発艇エリアに来ていないクルーがあるとまずこの Counting Marshal (Check Point Charlie)に通過の有無を確認した。通常であれば Starter は CC に出艇したか否かの確認をするが、クルーが多過ぎる為、Pontoon 毎に出艇を取り纏めるよりも、この Counting Marshal(Check Point Charlie)が一元的に管理する方が早い。非常に合理的な考え方である。この部署は NTO が担当した。

因みにこの「Check Point Charlie」の由来は冷戦時代にベルリンが東西に分断されていた時の検問所の呼称であるとの事。Charlie は人の名前ではなく、下記のアルファベットの呼び方である。(Charlie の”C”、日本語で言うと「津軽の”つ”」と同様である) 検問所 C という事である。意味は分かったが、それをこの部署名に適用するのは納得がいかない。Counting Marshal で良いだろう。Pre Starter は 2~3 レース先のクルーを発艇台後方に集めておき、クルーのコース進入をスムーズにさせている。

レース終了後はフィニッシュエリアの Marshal がクルーを速やかに Pontoon に誘導した。救助艇も要所に配備されており万全を期していたが、大会 2 日目（9 日）に M1X が接触事故を起こす事態があった。その為、審判部署配置を若干変更し、判定エリアでの Marshal を増やす措置が取られた。

又、通常の大会に使用する Bow Number は数字のみ記載しているが、Masters 大会では出艇クルーが多過ぎる為、以下の通り A1, B1 の様にアルファベットと組み合わせたものであった。

| | | |
|------------|------------|-----------|
| A- Alpha | J-Juliet | S-Sierra |
| B- Bravo | K-Kilo | T-Tongo |
| C- Chalie | L-Limo | U-Uniform |
| D- Delta | M-Mike | V-Victor |
| E- Echo | N-November | W-Whisky |
| F- Foxtrot | O-Oscar | X-X-ray |
| G- Golf | P-Papa | Y-Yankee |
| H- Hotel | Q-Quebec | Z-Zulu |
| I- India | R-Romeo | |



CC は上写真様に D1 であれば「Delta 1」とクルーを特定して無線で確認した。これは通常の大会で水上に出艇しているクルー数が約 48 クルーに対して、Masters 大会が約 160 クルーに及ぶ事への対応である。大会プログラムにも全てこのアルファベットと数字が記載されていた。

通常の大会であればブレードカラー、ユニフォーム、Bow Number からクルーを特定するが、クルーが多く、ブレードカラーも統一されていないこの大会ではそれは出来ない。アルファベットと数字の組み合わせであれば同じ Bow Number を付けたクルーが同時間帯に水上にいる事はあり得ない。これも大会運営のノウハウであろう。

尚、各部署の人員は以下の通り。ITO は国際審判員、NTO は国内審判員。
部署とその役割を特筆すべきもののみ以下の通り記載する。

a) Marshall 0 meter NTO

Warming up area 150m付近に待機し、marshal を行う。必要に応じて航行規則違反により警告を与える。

b) Marshall Warming Up Lane NTO

Warming up are 150m→700m の 4 レーンに待機し、marshal を行う。0 meter Marshal 同様航行規則違反があれば警告を与える。

c) Assistant Pre-starter NTO

発艇付近の Warm up are に位置し、2~3 レース先の出漕クルーが付近にいるか確認する。次のレースとなったら速やかにレーンに誘導する。

d) Pre-Starter ITO

次のレースに出漕するクルーをレーンに速やかに誘導する。2~3 レース先のレースに出漕するクルーを待機させる。クルーが多い為、この部署は重要である。3 分間隔のレースであると、該当レーン後方に上手くクルーを誘導しておかなければならない。因みに、Jury Member によると日本クルーは柔軟に対応していたとの事。

e) Starter(発艇) ITO 1 人

通常の業務手順は省略するが、本大会の場合、3 分間隔という超過密スケジュールであるので、クルーに対し速やかにレーンに入る様促す。

クルーを call する場合は、団体名は呼ばず国名であった。同一国の混成クルーは”Composite”、各国の混成クルーは”International”とした。

今大会においては過密スケジュールの為、トラブルが起こっても原則的に 10 分以上待たない。



Start

f) Assistant Starter NTO 1 人



右 Pre-Starter / 左 Starter

- g) Aligner NTO 1 人(Danish)
- h) Judge at Start (線審) ITO 1 人、NTO 1 人



Judge at Start

- i) Umpire1,2,3(主審 審判艇は 3 艇) ITO 1 人、Driver 1 人 (1 艇当り)
- j) Resp. Judge at Finish (判定) ITO 1 人、
- k) Finish Judge ITO 1 人
- l) Assistant at Finish NTO 1 人
- m) Marshal Hot Swap Lane NTO 1 人

出艇棧橋から出たクルーを速やかに回漕レーンに行く様指示する。

- n) Marshal After Finish ITO 1 人 NTO 1 人

優勝クルーを表彰棧橋に、他のクルーを速やかに帰艇する様指示する。

- o) Counting Marshal(Check Point Charlie) NTO 1 人

上述したが、今大会では回漕レーン 150m付近に位置し目の前を通過するクルーをチェックしていた。Check Point Charlie と呼ばれ無線で最も活躍していた部署と言える。



Counting Marshal(Check Point Charlie)

- p) Marshal Traffic NTO
out from Pontoon 2

出入棧橋付近に待機し、接触等のトラブルが無い様監視する。

- q) Resp.Control Commission ITO 1人
- r) Control Commission(CC1-4) ITO 1人 NTO 3人
- s) Control Commission(CC5) NTO

Rental boats

通常の大会であれば Jury は終日がある程度行動を共にするので連絡を取る事は可能である。だが、今大会の様に waiting(待機時間)が有る場合はその時間帯は自由行動となるので連絡が取れない場合がある。Protest が提出された場合で Board of Jury の協議が必要となった事を想定して関係者の携帯番号等をリストにする必要もあるだろう。

②業務に関して

大会前日 9月7日(水) 13時30分より Jury Meeting を行った。内容は上述する WRMR 特有のクルー数の多さに対応する説明であった。約 2 時間の説明の後、通常の大会で行っているコース確認は無く Opening Ceremony(Copenhagen Town Hall)に向かった。上述の通り、市内は景観を重視しており昔ながらのルネッサンス様式の建物で統一されている。又、自転車王国であり市内でも専用レーンが整備されており、多数の自転車が通っていた。唯、自転車置場の整備までは至っていない様である。

今大会も Zonal Umpiring (定められた Zone を担当する主審)で行った。Umpire 1 は 100m 付近、Umpire 2 は約 400m 付近、Umpire 3 は約 750m 付近で監視する。必要に応じてコース内に入り対処する。接触の可能性ある場合は必要に応じてコース内に侵入し適切な対応を取る。

レース No.2104 M8+ 7 レーン JPN(Dankai/Nosei)がスタート 150m 付近で 6 レーン DEN に侵入しオールが接触した。Zonal Umpire であった為、逆サイド(1 レーン側)にいた Umpire 1 から良く見えず、Starter がレースを止めた。Umpire の動きに迅速さが欠けていたのは已むを得ないかもしれないが、これは Zonal Umpire の弱点であろう。無線では Umpire 1 から JPN(Dankai/Nosei) は”Disqualified”の Word が発せられたが、Starter Ms.Eleanor (FRA)は JPN に危険行為による Warning (Yellow Card)を与えるに留め、全艇を Start Pontoon に戻し、全艇で再レースを行うとの判断を下した。6 レーン DEN を含む他艇からのクレームは無かった。

Rule は重要であるがそれが全てではない。大会によってはその開催意義を尊重した判断も必要であろう。(その日の夜、宿舎で Ms.Eleanor が小生に「日本から来て 150m で終わりにするわけにいかないでしょ。感謝してよね。」と言ってきた。彼女は若い優秀でチャーミングな女性審判員である。又、当該 JPN クルーの方から聞いた話であるが、接触した 6 レーン DEN クルーから「飲みに行こう」と誘われたらしい。マスターズレースとはこうあるべきか。)

レース No.3027 W4X で 1 レーン LTU が 600m 付近から大きく蛇行し 2 レーン GER を遮る様にコースを 6 レーン付近まで横断した。LTU は 1 位でフィニッシュしたが、2 位 2 レーン GER から挙手による”Objection”があり、Umpire から赤旗が挙げた。Board of Jury で協議した結果、1 レーン LTU は Disqualified となり、2 以下は着順通りとなった。LTU からその判断に対する Protest は無し。

判定は ITO 2 名、NTO 1 名で、基本的に判定員が着順を決め、主席判定員が”Official”とするもの。僅差の時は写真判定を参考にするものであった。今大会で困難であったのは、上記の通り Bow Number にアルファベットと数字を記載するので判定部署の様に水上から離れた場所であるとよく見えない。双眼鏡を使って凌いだが 3 分間隔、8 艇レースでは辛いものが有る。又、判定員は無線から入ってくる棄権か否かのやり取り（主に Starter, Pre-Starter, Counting Marshal）を良く聞き、棄権の有無を確認する。国内大会もそうであるが、レース数が多く棄権クルーが多いとそのやり取りで無線を占有してしまう。他の部署は出来る限り無線に傍受し聞き漏らさない様にしていた。無線は 1 台しか渡されないのので、上記のように無線が占有されている場合はチャンネルを変更して会話をしていた。

3 分間隔であると、遅いクルーは次のレースのクルーに追い抜かれる珍事が発生する。小生は判定を担当した時も、W1X (J)が次レースの M4X に 900m 付近で追い抜かれる事態があった。750m 付近で待機していた Umpire 3 が Course out する様呼びかけ接触は免れた。W1X の動きを見ていたが、当人も追い抜かれる事は判っている様でゆっくり Course out しようとしていた。（勿論、審判艇から指示もあったが） Masters 大会らしい一面であろう。



写真判定用カメラ



写真判定

線審は、ITO 1 名、NTO 1 名で行った。写真の通り、ステッキボートは固定式で線審が艇に長さに合わせて動くものである。小生が担当した時間帯で 10 レース以上の False Start を取った。クルーに力が入っているのか、ステッキから艇が離れる事が多かった。（さすがに小生も 1 大会で 10 以上の False Start を取ったのは初めてである）

赤ランプが上手く作動しなかったので、赤旗を使用した。線審から Starter に False Start のレーン、クルー名を伝え、Starter は全艇が Pontoon に戻った後 2 分前コールをし、False Start 該当クルーに Warning (Yellow Card)を与えた。

発艇は、ITO 1 名、NTO 1 名で行った。Marshal 及び Pre-Starter がクルーをステッキまで誘導するので、スムーズに呼び込む事が出来る。タイムは Swiss Timing 社のシステムで計測されたが、back up として NTO が無線で Starter の発艇コールを拾って判定に送っていた。

最終日の Starter を指名されたが、逆風が強くクルーがなかなかステッキボートに付ける事が出来ない。（日本の朝日レガッタの様なものと言えば想像し易いだろうか）3 分間隔のレースで悪天候であると遅れを取り戻す事は困難である。線審と連携し、又、クルーに効果的に指示しなければならぬ。発艇定刻から約 5 分遅れが生じると、Deputy P.Jury Mr.Jan から、「何回やってもステッキに付ける事が出来ないクルーは Course Out させる様に」と指示があった。結果として発艇定刻から約 10 分遅れで全レース、Course out させる事無く終了させた。Course out させる判断は、クルーに事前に説明したとしても揉める可能性が有るので出来る限り避けた方が良いだろう。

今大会はメディアへの露出度が低い事も有り Advertising については一言も触れなかった。他の FISA 大会によっては専任の FISA Umpiring Commi. Member が CC に常駐して Advertising について Check する程である。つまり ITO の中にも Advertising を理解していないものも多いという事である。メディア対応が必要な大会については、審判員にセミナー資料のコピーを配布するなり大会時に事前の統一見解のレクチャーが必要であろう。

7. FISA Seminar

今大会は過密スケジュールの中 FISA Seminar が開催された。講師は Paet I, II 共に FISA Umpiring Commi. Ms. Gabrielle Isenschmid Weber(SUI)で、Waiting 時間を利用して 2 班(Group A / Group B) に分け、2 回 (1 回約 2 時間半) に分けて行った。

9 月 8 日 (木) 午前 Group A Part I

9 月 8 日 (木) 午後 Group B Part I

9 月 9 日 (金) 午前 Group B Part II

9 月 9 日 (金) 午後 Group A Part II

詳細は省略するが、Part I では FISA の組織、人員体制、歴史、FISA 国際審判員の人数、男女比率、地域別等についてであった。Part II は近年 FISA が力を入れ始めている Coastal Rowing, Para-Rowing, Masters のこれまでの経過、レースの有り方等の説明であった。

Coastal Rowing は沿岸で開催される Rowing で Para-Rowing については Control Commission でのストラップの固定、視覚障害者の目隠しの確認等、これまでの Seminar には無い判り易い説明があった。

8. Special Event ITO/NTO/OC 8+ Race

全てのレース終了後、恒例?の Exhibition として ITO/NTO/OC 混成による 8+ 500m 4 艇(ITO/ NTO 2 艇、OC2 艇)レースが行われた。このレースを楽しみにしている ITO も多かった。「Matsuda も乗らないか」と言われたのでせっかくの機会であるし申し込んだ。海外での乗艇は勿論初めてであるが、外国人の艇に乗る事も初めてであった。Rowing 用語で興味深かったのは、通常 Stroke Side, Bow Side と呼ぶが、国によっては、Stroke Side(右舷)を Port Side, Bow Side(左舷)を Starboard Side と船舶用語で呼ぶ者もいた。

国が違う者同士が同じ艇に乗艇すると一体感が生まれるものである。乗艇した者全員に表彰棧橋でメダルが授与された。これも Masters 大会らしいイベントであろう。



Jury/ OC 8+



表彰棧橋の ITO/NTO OC 8+ 4 クルー

III. 陸上施設等に関して

- ・発艇、線審、判定等のシステムは Swiss Timing 社が行っていた。同社から 2 名の担当者が常駐していたが、現場のオペレーションは NTO が行っていた。大会によっては同社の担当者が発艇、判定に常駐しオペレーションまで行うのだが、今大会は NTO に任せ、トラブル発生時のみ出動するものであった。
- ・今大会では NTO は約 32 名召集されており、それ以外でボランティアが多数参加していた。1 日当り約

100名確保していたとの事。

- ・艇は全て屋外の可動式アームに置かれた。ヨーロッパの国々はトレーラーに艇を積み込み自家用車で牽引している。レース終了後は再度積み込み、すぐに帰途についていた。彼らはそのように欧州各地で開催されるレガッタに参加しているとの事である。
- ・出艇桟橋で脱いだクルーの靴類はボランティアがクルー毎にビニールに入れて管理していた。従って出艇桟橋に靴が並ぶ事は無い。
- ・コースには Wi-Fi が設備されていたが、上手く機能していないと参加者から不満があったとの事。小生も PC を持参していたが、場所により繋がりにくかった。

IV. 安全管理

今大会でもだが、テロ対策の一環として安全管理には配慮されていた。医師、救護所、警察、消防、ダイバー等が配置され緊急連絡網も整備されており、AED も各所に設置されていた。(設置場所も書面に記載されている) 又、危機管理チームが組織され、メンバーは P.Jury、OC 等の各 Chairman で構成されており、何かあれば FISA Office に召集される。

V. Masters Dinner

9月10日(土)夜に恒例の Masters Party が開催された。恒例の晩餐会で参加クルー多く出席し盛り上げていた。今大会の Party では特にイベントの様なもの無く。飲食するのみであった。国は違うがアルコールが入れば皆陽気に楽しむものである。注文を付けるとすればもう少しイベント要素を含めれば更に盛り上がるだろうと思料するが、企画する余裕が無い様にも感じた。

帰りに夜空を見上げたが、東京と違い空気が澄んでいるからまさに散りばめる様に星が見えていた。終了は 23 時 00 分頃となり宿舎に戻ろうとしたが、手違いがありバスの手配が出来ていなかった。その為、約 30 分この夜空を眺めながら車を待つ事となった。



Masters Dinner

V. 各写真



Opening Ceremony



観客席



Accreditation



Bow Number 配布所



レンタル艇受付(Filippi 社)



Pontoon



オール置場



審判艇・救助艇栈橋



艇庫上のテラス



Warm Up 用エルゴ (20台が設置されていたが大会参加者数からすると少ないであろう)

VI. 終わりに

世界中から Rowing 好きが集う大会であった。若者顔負けの漕ぎっぷりを見せた方々が多くおられた。日本から参加された方々の中には小生が国内の大会でもお世話になっている方が多くおられ、交流を深める事が出来た。レースであるので勝負に執着はするが、心から Rowing を楽しんでいる様に見えた。生涯スポーツとして Rowing が国内でもっと脚光を浴びても良いのではないかと思料する。クルー数が多いのでトラブルも発生したが、出漕関係者は概ね大会運営に協力的であった。

現地は国際大会の開催数は他の欧州地域に比べ少ないが、要所にベテランを配置し大会運営をスムーズに行える様配慮されていた。又、欧州各地で開催される国際大会でも運営方法等を吸収しているとの事が大会を成功させる重要な要因であると言える。

審判業務ではきめ細かいサポートが出来る優秀な NTO の重要性を改めて実感した。大会期間中、各審判部著には専任の NTO が配置されており、非常に頼りになった。やはり現地を良く知る NTO が上手く機能してこそ大会が成り立つものである。上述の通り、イレギュラーなケースは責任ある ITO が判断すれば良い事である。

休憩時間に昼食を取っていると、不意に「Matsuda!!!」と大柄な男性外国人漕手が小生を覗き込んできた。驚いたが、彼が本年 6 月に Poznan, Poland で開催された World Cup III に ITO として共に審判業務に就いたブラジル Mr. De Mattos Gilberto である事が判るのに時間は掛らなかった。暫し再会を喜び合った。ブラジルから 10 名で参加しており彼の奥様も出漕されていた。ブラジル人らしい陽気な性格は漕手としても仲間を惹きつけている様である。今大会 6 種目に参加したらしい。本年開催されたりオ五輪の準備も大変だった事を漏らし、今はホッとしているとの事。近い将来再度共に審判業務出来る事をお互い期待し合った。彼だけでなく、ITO、又 FISA Commission Member からも 2020 年東京五輪開催の激励を受けた。皆一様に「日本であれば何ら問題ないだろう」との思いがあり、日本が信頼されている事を大いに感じた。

最後になりましたが、本大会に派遣させて頂きました事に就きまして、日本ボート協会 上野審判委員長、千田国際委員長、相浦事務局長、事務局審判担当 竹内様、事務局国際担当 藤田様に心より感謝を申し上げます。

Mange Tak Copenhagen!!

以上